语料库及内省法在日汉语言研究中的应用策略探讨

朱鹏霄 著

339
SEU 2642669

南開大學出版社

2642669

H36
339

语料库及内省法在日汉语言研究中的应用策略探讨

朱鹏霄 著

东南大学
图书馆藏书

南开大学出版社
天 津

图书在版编目(CIP)数据

语料库及内省法在日汉语言研究中的应用策略探讨 / 朱鹏霄著. —天津:南开大学出版社,2012.8

ISBN 978-7-310-03968-5

Ⅰ. ①语… Ⅱ. ①朱… Ⅲ. ①日语—对比研究—汉语 Ⅳ. ①H36②H1

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2012)第 170073 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人:孙克强

地址:天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码:300071

营销部电话:(022)23508339 23500755

营销部传真:(022)23508542 邮购部电话:(022)23502200

*

唐山天意印刷有限责任公司印刷

全国各地新华书店经销

*

2012 年 8 月第 1 版 2012 年 8 月第 1 次印刷

210×148 毫米 32 开本 9.875 印张 4 插页 248 千字

定价:25.00 元

如遇图书印装质量问题,请与本社营销部联系调换,电话:(022)23507125

序 一

先于大家看了鹏霄付梓前的《语料库及内省法在日汉语言研究中的应用策略探讨》，感到非常高兴，把一份真心的祝贺和感谢送给鹏霄，祝贺承载着鹏霄不懈努力和诸多前辈鞭笞的本书顺利问世，祝贺鹏霄走过了又一段不平凡的治学过程，也感谢鹏霄为中外日语研究界提供了一份沉静的学术思考和研究成果。

本书收录了鹏霄在北京日本学研究中心博士学习期间和在黑龙江大学从事博士后研究工作期间的学术思考和研究成果。这些思考和成果运用科学和前沿的研究方法，通过语料库的语言数据，对目前日语研究的热点问题和难点问题进行了探索。各部分内容对前人研究理解准确，分类、整理、阐释清楚，观点明确，说理性强。这些思考与研究成果，对进一步促进中外日语研究具有理论与实践意义，值得肯定。衷心希望本书的各部分内容能受到中外学者的关注，引起热烈的讨论。

在学术道路上，任何一个年轻学者都不可能一帆风顺，都必须经历挫折，直面磨难，不懈探索，才能获得成功。在这一点上，鹏霄也不例外。在中国日语研究的特定发展阶段，如同相当多的年轻学者一样，在开展日语研究初期，鹏霄也经历过一些曲折。但是，在中日两国知名学者的悉心呵护和鞭策下，鹏霄振作精神，直面困难，完成了本书的撰写。从一定意义而言，本书的写作过程是他学术成长的过程，也是其学术品格进一步升华的过程。我相信鹏霄会真心感谢在学术道路和人生道路上关心、帮助过自己的所有前辈、老师、同事，无论是善意的指导还是近于苛刻的批评。我相信，走过这段路后，鹏霄会进一步解放思想，更加大胆

地探索，走出更宽广的学术道路。

另外，这本书各部分的体例也值得评价。每章除了考证外均都包括了研究背景、数据范围、引证等方面，考察结构清楚，推论令人信服，严守学术规范，是值得踏入日语研究领域的年轻学者，特别是正在硕士、博士阶段学习的研究生学习、效仿的。

本书的出版和国家社会科学基金项目《基于语料库的日语周边性语言现象多维度实证研究》项目的立项成功是鹏霄发展的又一起点，衷心地祝福他在日语研究方面进一步勇于探索，为中国的日语研究作出新的贡献。

中国日语教学研究会名誉会长
天津外国语大学校长 孙孟阳

2012 年 5 月于天津

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序 二

本书的作者朱鹏霄从北京日本学研究中心博士课程毕业以后已将近6年。当离开自己6年时间的学生，又捧着自己6年来潜心研究的成果回到自己身边时，作为指导教师从内心里为他感到高兴。当然，6年的时间在人生的道路上应该是很短的一瞬间，然而，从学业的角度来看，它可以等同于我们现在事实的博士课程的两倍时间。其间，本书作者所走过的道路，我想读者可以从他的后记中略见一斑。

朱鹏霄来到北京日本学研究中心学习时，给我留下的印象是，话虽不多，但非常稳重、踏实。他选择的博士论文题目与汉日主题句对比研究有关，应该说具有相当的难度和挑战性。但他知难而上，虚心求教，刻苦钻研，其研究成果得到了论文答辩委员会的一致认可和好评。博士课程毕业后，他也没有停下研究的脚步，又到黑龙江大学博士后流动站进行研究。正是有了这些年来的潜心研究，才有了今天这样的成果。正是验证了中国的那句老话，“功夫不负有心人”。

作为一个中国的日语研究者，如何来选择日语研究的课题，如何让自己的研究能够有所创新，这始终是一个困扰着每一个研究者的难题。朱鹏霄通过这些年来自己的思考和摸索，可以说在这一方面找到了自己前进的方向，并在本书中为读者展示了他思索前行、研究实践的成果。

首先，对于中国研究者来说，日语不是我们的母语，我们不能靠内省的方法来对日语进行研究。以往我们要想克服这一缺点时，是要花费很大的气力的。我们可能要为收集语言数据，比我

们的日本人同行多花费几倍乃至几十倍、上百倍的时间。但是，随着计算机事业的发展，大量的语料库不断问世，为我们收集语言数据提供了极大的方便。然而，即便是有了方便的工具，选择什么样的课题来研究，还是需要对整体研究现状的把握和敏锐的问题意识。

朱鹏霄在本书中选择的研究课题，「数量形容詞の文法特性の相違に関する一考察」、「『～かどうか』構文に関する一考察」、「『ながら』構文に関する一考察」、「主語が有情物の『ある』に関する一考察」，这些都可以说是一些边缘性的问题，对于日语母语者来说，他们都知道这些用法的特殊性，尽管平时很少使用，但只要使用，他们就不会用错。但是，对于学习日语的外国人来说，问题就不那么简单了。为什么这些用法都是特殊的？什么场合下这些用法是可以成立的？可以成立的这些特殊用法又有哪些内在原因？不把这些问题搞清楚，对于日语学习者来说，这永远是一个谜。而在本书中，朱鹏霄正是运用了语料库，搜索出了足以说明这些问题的语言数据，并在此基础上进行分类、整理、说明，把过去模棱两可的问题，或者是存在一些误解的问题，进一步阐释清楚。这样的研究成果，应该说不仅对日语学习者来说有所贡献，对于日语本体研究来说，也同样有所贡献。

另一方面，我们中国日语研究者就完全不需要内省式的研究了吗？也不是。当我们将中日两种不同语言进行对比研究时，作为中国人对于自己的母语——汉语的内省，就完全可以帮助我们深入思考，达到验证理论正确性以及判断语言数据准确性的目的。

朱鹏霄在本书中选择的另外两个研究课题，「日中の情意形容詞と二重主語構文に関する一考察」、「『カキ料理は広島が本場だ』構文に関する一考察」，可以说是结合了他对母语的内省，对中日两国语言之间都存在的“双重主语句”（汉语也称“主谓谓语句”）现象进行了对比研究，分别对其异同点进行了分析。这样的

课题不仅对中日两种语言的深入研究有益，进而对于语言类型学、普通语言学的深入开展也都具有参考作用。

我想，作为一个年轻的学者，掌握了这样两种研究的方法和武器，其发展的态势将是一发而不可收的。果不其然，在2012年的国家社会科学基金项目的申请、评审过程中，朱鹏霄申报的《基于语料库的日语周边性语言现象多维度实证研究》项目，在众多的项目中脱颖而出，得以立项，就说明了这一问题。众所周知，在我国的文科类研究项目中，国家社会科学基金项目，现在被视为纵向的最高级别研究项目，每年申报评审的竞争都非常激烈。在2012年的语言类立项项目219项中，日语语言研究项目只被批准了5项。

我相信，通过朱鹏霄自己的不懈努力，一定可以出色地完成这一国家项目，并为我国日语研究的进一步发展作出更大的贡献。

中国日语教学研究会会长
北京日本学研究中心主任 徐一平

2012年5月于北京

目　次

序　章 1
1　はじめに 1
2　研究背景 2
2.1　中心的なテーマの研究の成熟 3
2.2　周辺的なテーマの研究の開拓 5
2.3　異言語間の対照研究の展開 8
2.4　文法論の研究方法の多様化 9
3　研究目的・研究方法 19
4　研究資料 21
5　本書の凡例 24
6　本書の構成 24
注釈 26

第一章　数量形容詞の文法特性の相違に関する一考察 30
1　はじめに 30
2　先行研究 31
3　問題意識・調査資料・検索方法・検索結果 34
4　数量形容詞の文法特性の違いに対する考察 37
4.1　数量形容詞連体修飾用法における違い 38
4.2　数量形容詞連用修飾用法における違い 78
4.3　数量形容詞述語用法における違い 85
5　おわりに 88
注釈 89

第二章　「～かどうか」構文に関する一考察 93
1　はじめに 93
2　先行研究 94
3　問題意識・使用資料・本文の立場 97
4　「～かどうか」に対する考察 100
4.1　使用頻度に対する考察 101
4.2　時代分布に対する考察 102
4.3　後続述語に対する考察 102
4.4　発話前提に対する考察 120
5　終わりに 121
注釈 122

第三章　「ながら」構文に関する一考察 124
1　はじめに 124
2　先行研究 126
3　問題意識・使用資料・検索方法・検索結果 128
4　順接用法の「ながら」における主語と述語 132
4.1　主文主語が有情物の場合 132
4.2　主文主語が無情物の場合 140
5　終わりに 144
注釈 145

第四章　主語が有情物の「ある」に関する一考察 149
1　はじめに 149
2　先行研究 151
3　問題意識・使用資料・検索結果 153
4　主語が有情物の「ある」に関する考察 154
4.1　「所有」を表す用法 154

4.2 「境遇」を表す用法 160
4.3 「存在」を表す用法 163
5 終わりに 171
注釈 172

第五章 「鼻は象が長い」構文に関する一考察 173
1 はじめに 173
2 先行研究 173
3 問題の提起 175
4 「鼻は象が長い」構文に対する考察 176
4.1 繰り上げ作業における規則と制約 176
4.2 繰り上げ作業後の構文の位置づけ 181
5 終わりに 187
注釈 188

第六章 「象は鼻が長い」構文に関する一考察 191
1 はじめに 191
2 先行研究 191
3 問題の提起 197
4 二つの主語の間の意味関係に対する考察 198
5 終わりに 204
注釈 205

第七章 日中の情意形容詞と二重主語構文に関する一考察 208
1 はじめに 208
2 先行研究 208
3 問題の提出 212
4 情意形容詞に伴うガ格名詞の主語性の統語的検討 212

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

5 中国語の情意形容詞の主語の取り立て方と二重主語構文 . 215
5.1 中国語の情意形容詞の語類の限定 216
5.2 中国語の情意形容詞の主語の取り立て方と二重主語構文 217
5.3 中国語の情意形容詞の機縁項の導入方法及び性格の検討 220
6 終わりに 228
注釈 228

第八章 「カキ料理は広島が本場だ」構文に関する一考察 230
1 はじめに 230
2 先行研究 230
3 問題意識・調査資料 233
4 日本語の「カキ料理は広島が本場だ」構文に関する考察 . 234
5 日本語と中国語の関係構文の対照考察 251
6 終わりに 258
注釈 259

終 章 263
注釈 268

参考文献 269

後 記 301

序 章

1 はじめに

言葉は思考の道具であり、伝達の道具でもある。人間は言葉を使うことにより、感情、意思、情報などを受け取りあったり伝えあったりしている。言葉の持つこのような言語機能は普通、文に託されて実現されている。文は言語活動の基本単位とされ、語を材料として組み合わせた統一体である。人間は語を持って文を構成する時、決して無秩序ではなく、一定の決まりに従って行っている。したがって、文には規則や法則が潜んでいると考えられている。そのような規則・法則があってこそ、人間は有限の表現材料と表現規則を使って無限の内容を表し分けることができるのである。

言うまでもないことだが、日本語の文における規則や法則の仕組みを記述するのが日本語の文法である。日本語の文法は今まで様々な角度から研究され、相当の成果も挙げられてきた。また、それにより、日本語の仕組みや各側面における特徴なども少しずつ明らかにされてきた。しかし、一方で、研究の深化に伴い、固有の視点に沿って進んでいっても、伝統的な研究分野のホットだった課題について新しい知見を加えることはますます難しくなってきた。つまり、ある意味で、日本語の文法研究はボトルネックを抱えた状態に陥っている。

この困難とでも言うべき状況から抜け出すために、数多くの

研究者による様々な模索と試みが繰り広げられてきたが、そのうち、特に筆者の関心を引いているものとしては三つの動きが挙げられる。一つ目は、伝統的な研究分野またはその中の中心テーマから離れ、真新しい研究分野または伝統的でありながら研究成果のあまり蓄積されていない周辺的な用法・課題に目を向ける動きである。二つ目は、日本語の研究と他の言語研究とを結びつけ、様々な視点や角度から比較・対照を行うことにより、異言語間の普遍性と個別性を見出して捉えようとする動きである。三つ目は、研究者の直感や内省または作例に頼って結論を出すという今までの主流をなした研究方法を問い直した上で、大規模のコーパスを利用して集めてきた現実の用例の用法実態をきめ細かく観察・分析することにより日本語研究の道を拓こうとする動きである。

上述のような動きに啓発され、本研究は、コーパス言語学の方法を取り入れながら、日本語の特定の言語形式の周辺的な現象・用法に内在する決まりを探り、また、内省方法を利用して、日本語のいわゆる「二重主語構文」と中国語の「主谓谓语句（主述述語文）」の比較を行おうとするものである。

2 研究背景

近代的日本語文法研究は山田孝雄に始まり[(1)]、今まですでに百年あまりの歳月が経った。この百年あまりの間に、数多くの文法研究者のたゆまぬ努力により、日本語文法研究において実り多い成果が挙げられてきたが、しかし、同時に、今までと同じような道筋に沿って進んでいっても大きな展開が望めないという困難な状況に直面し、他方向からのアプローチが求められつつある。今までの研究成果の蓄積およびこれから進んでいけ

そうな方向については、野田（2004a、2004b、2005）で適切にまとめられている。以下の節では、他の論者の主張を援用しながら、野田（2004a、2004b、2005）の主たる論点を紹介していく。

2.1 中心的なテーマの研究の成熟

野田（2005:17）は、文法研究の焦点の所在に基づき、現代日本語の文法研究を「総合文法の時代」、「理論文法の時代」、「記述文法の時代」という三つに大きく分けている。以下、それを順番で簡単に述べておく。

総合文法の時代は1900年頃から始まり、前世紀の1950年頃まで続く。この時代は、研究者が自分一人の力で日本語文法の全貌を総まくりしようとするのが特徴であり、実際の研究においては、文法理論の構築だけではなく、具体的な文法現象の記述も重要視されている。なお、野田（2005:17）では、この時代の代表的な研究著作として、松下大三郎（1928）の『改撰標準日本文法』が挙げられている。

理論文法の時代は1950年頃から始まり、前世紀の1970年頃まで続く。この時代は、具体的な文法現象の記述より、理論レベルの検討がより重要視され、文がどのように構成され、どのように成立するかということに関心が強く寄せられるのが特徴である[(2)]。なお、野田（2005:17）では、この時代の研究の集大成となる著作としては、渡辺実（1971）の『国語構文論』が挙げられている。

記述文法の時代は1970年頃から始まり、前世紀の末頃まで続く。この時代は、抽象的な文法理論の検討より、具体的な文法現象のきめ細かい記述が学者の関心を集めているのが著しい特徴となっている。また、研究者の数の増加と専攻の分業化の進

行に伴い、個別の文法記述がより精密になり、個々の文法カテゴリーについての検討もかなり深まってきたという。

また、野田（2005：17）に指摘されたように、記述文法の時代にも研究テーマの焦点があり、それが下の表 1 に示されるように、年月とともに移り変わってきている[(3)]。

表 1　記述文法の時代の研究焦点の移り変わり

年　代	時　代
1970 年頃	格の時代
1980 年頃	アスペクト・テンスの時代
1990 年頃	モダリティの時代
2000 年頃	多角化の時代

格の時代の研究の発展は、生成文法の流入、文の意味への関心の高まり、陳述論の収斂などと関わり、アスペクト・テンスの時代の研究の発展は、語彙論的統語論の応用、日本語教育の広がりなどと深く関係し、モダリティの時代の研究は伝統的な陳述論への着目でありながら単純に重ならないと、野村（1990：20－21）が分析している。また、上述の移り変わりについて、野田（2004b：2；2005：17）は、それが述語の中で前のほうに現れる形式から後ろのほうに現れる形式へとだんだん関心が寄せられ、文の中で客観的なことを表す部分から主観的なことを表す部分へという順序だったと指摘したうえで、その変遷の理由について、客観的な言語形式のほうが扱いやすいので、そこから研究が盛んになり、その研究が一定のレベルに達すると、より主観的な形式へと研究の中心が移ってきたと分析している。

また、上述の内容と関連して、野田（2004b）は中心的なテ

ーマの記述研究の成熟が①格についての記述的研究、②モダリティについての記述的研究、③現代語文法全体についての記述的研究、④現代語の記述的研究の源流の解説・評価という四つの面に現れていると指摘した。関連の研究成果を評価した時、野田（2004b、2005：18）は、主要的な文法カテゴリーについての研究がかなり高い水準に達し、現代語の記述的研究が成熟の時代を迎えると同時に、一時代の終わりも近づいていると述べている。

2.2 周辺的なテーマの研究の開拓

野田（2005：16—18；2004b）の指摘にあるように、格やボイスの研究から始まった記述文法の時代がモダリティの研究に至り、それぞれの研究がすでにかなり高いレベルに達しているので、今までの方法を踏襲しても文レベルの記述的研究で新しい成果を挙げるのが難しくなっており、周辺的なテーマに手を伸ばしたり、他の研究分野と連携したりして、新しい研究方法を開発しなければ、特に研究者が生き残りにくくなっている。つまり、今の時代においては、伝統的なものの束縛から抜け出て、研究テーマや研究領域、研究方法の拡大と開拓が求められているのである。野田（2004a、2004b、2005）の言う研究領域や研究方法の開拓と拡大についてはこれからの 2.3 節と 2.4 節で触れることにするが、ここでは、主として研究テーマの拡大、言い換えれば、研究対象の拡大について紹介していく。研究対象の拡大には、主に以下の二点の内容が含まれている。

一つ目は話し言葉の研究を行うことである[(4)]。野田（2005:20）に指摘されたように、長い間、日本語の文法研究は書き言葉を中心に展開されてきた。20 世紀の前半、日本語の話し言葉の研

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com